

「社会福祉」をめぐって—連載のねらい—

天理大学人間学部講師
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

「社会福祉」と聞いて、イメージするものは、どのようなものだろうか。

筆者は、高校に出向いて、進路指導の一貫として、高校生に対して講義する機会がある。その際、高校生に「社会福祉と聞いて、イメージすることは？」と尋ねると、「介護」と答える生徒が最も多く、その他には「車いす」、「子ども」など限られたキーワードが絞り出される。「社会福祉」という言葉そのものは、多くの人に共有されているが、その活動や内容の幅広さを理解している人は多くない。しかし、実際の活動内容を見てみると、近年では、教育機関にスクールソーシャルワーカーが配置されたり、困窮する外国人への支援をおこなったり、刑務所や更生施設の退所者への支援、まちづくりに関わる子ども食堂やフードバンク、「8050問題」のような世代をこえた課題への対応や、長時間労働に悩む企業に対するメンタルヘルスの支援など、「社会福祉」は様々な場面で一人ひとりの生活を幅広く支えている。

現代社会で拡大していく社会福祉

「社会福祉」をめぐって、その展開を概観すると、戦後社会において「社会福祉」の役割は、拡大し、変容してきた。日本では、憲法に基本的人権をはじめ、生存権・教育権などの社会権が明記され、それに基づき1949年に福祉三法が成立し、生活保護、児童福祉、障害者福祉がスタートした。その後、高度経済成長に支えられ、高齢者や障害者の施設が建設され、社会保障においても皆年金・保険制度が整えられる中で、日本も先進諸国と同様に、国家が、国民の最低限度の生活を保障する「ナショナル・ミニマム」を目指す福祉国家への歩みを進めてきた。その中であって、日本における福祉国家体制の特徴は、年功序列・終身雇用の慣行をもつ企業と、「男性稼ぎ手モデル」と言われる「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業によってケアを担う家族によって下支えされてきたことにある。

しかしながら、1973年にオイルショックが起き、先進諸国が高度経済成長から低成長へと移行し、さらには、1990年代のバブル経済の崩壊により、平成の30年間で「失われた30年」と呼ばれるように不安定な経済の中で、これまでの福祉国家体制は大きく揺らぎ、転換が図られるようになった。企業は、グローバル化への対応を迫られ、年功序列・終身雇用の慣行を見直し、成果・能力主義によりリストラをおこない、正規雇用から非正規雇用へ雇用の柔軟化をすすめた。ケアを担ってきた家族も、男性の収入が不安定になることで、共働き世帯が増加し、そのことによって、子育てや介護といったこれまで女性が担ってきたケアを社会化する必要性に迫られるようになった。加えて、少子高齢化や晩婚化、単身者の増加などにより社会福祉のニーズは、多様化・複雑化してきた。その中、2000年の介護保険を皮切りにして、社会福祉の担い手に対して規制緩和がすすめられ、企業や非営利セクターなど多様な供給体が参入するようになった。このことで、国家がナショナル・ミニマムを保障する「社会福祉」は、個人の契約による「福祉サービス」へと変容を遂げてきた。こうした変容は、新たなニーズを掘り起

こし、誰もが社会福祉の受け手であり、担い手であるという実態を生み出しつつある。政策の上では、「地域包括ケアシステム」が掲げられ、コミュニティベースの社会福祉の構築が模索されている。このように簡単にはあるが、社会福祉の展開を概観してみると、現代社会の変容の大きな流れがみえてくる。

天理教と社会福祉活動

「社会福祉」をめぐって、もう一つイメージされるのが、「困っている人をたすける」という点である。「困っている人をたすける」という点において、社会福祉は宗教とも密接に関連して、現在の形に至っている。例えば、社会福祉の成立背景は、資本主義が誕生する18世紀のイギリスに遡ることができるが、産業革命によって都市に流入した労働者たちの中で、失業し、貧困に苦しんだ人々を救済したのが篤志家や宗教者たちであった。そうした活動が慈善組織協会(COS: Charity Organization Society)として組織化されたことが、現在の社会福祉を生み出す系譜の一つになっている。現在でもキリスト教や仏教などを母体にして社会福祉活動がおこなわれており、天理教においても、これまでに社会福祉活動が展開されてきた。

戦後、天理教では、戦災孤児の受け入れをおこなってきた教会が、児童養護施設を設立したり、教会における里親活動が盛んにおこなわれている。また地域福祉の担い手である民生・児童委員や、教誨師や保護司として犯罪を犯した人や非行に走った人を支援する役割を担っている天理教の教会長や信者もいる。近年では、子ども食堂や、高齢者や子育てのサロン活動をおこなうなど、新たな形で「困っている人」にアプローチし、接点をもつために社会福祉活動が展開されている。こうした天理教内の社会福祉活動は、天理教教会本部の布教部社会福祉課が、研修の実施や、情報提供、ネットワークの形成などをおこなっている。

天理教と社会福祉のみならず、宗教と社会福祉の関係性については、様々な論点がある。「困っている人」にとっては、宗教者による救済が「布教」を目的とするかどうかに対して、抵抗感があったり、社会福祉活動をおこなう宗教者自身も、自らの宗教者としてのアイデンティティの揺れを感じる場合もある。しかし、実際に「困っている人がいない社会」という目標は、サポートを受ける人にとっても、する側である宗教者や社会福祉の担い手にとっても共有する事ができるものである。先述したように「社会福祉」に求められるものは拡大している中に合って、その実態を共通言語として、社会福祉と宗教が対話する中に、新たな社会づくりへの可能性が開けてくるはずである。

本連載では、「社会福祉からみえる現代社会とは何か」「天理教をはじめ宗教における社会福祉活動とは何か」この2つの問いへの応答をしていきたい。社会福祉の成立や歴史を紐解き、社会福祉の援助実践であるソーシャルワークの展開や、キーワードを整理することで、現代社会を説明する幅を拡張していきたい。また、そうした現代社会において、天理教をはじめとして宗教の社会福祉活動にどのような役割が期待されるのかについても検討をおこなっていきたい。